

特定非営利活動法人 国際柔道連盟

柔道教育ソリダリティー

第8回講演会

「NPO法人

柔道教育ソリダリティー

「この4年間の歩み」

本法人理事長 山下泰裕

2010年6月14日(月)

於：東海大学校友会館

理事長の山下泰裕です。本日はお足もとの悪い中を大勢の皆さんにお越しいただきまして、ありがとうございます。

本法人「柔道教育ソリダリティー」の講演会も、今回で8回目となりました。1回目は2006年12月、トヨタ自動車(株)前会長・奥田碩氏(現・トヨタ自動車(株)取締役相談役)にお忙しい中をおいでいただき、「小さくても組織として立ち上げるべき」との提案をいただきました。

本法人は、ここにお集まりいただいた多くの会員の方々や、協賛いただいた企業の方々のお力添えがあつて活動を展開しています。今回は4年間の活動の節目として、私から本法人の沿革

などについてお話したいと思います。なにぶんにも話すことはあまり得意ではありませんが、なぜ本法人を立ち上げたのか、まずはこれまでの流れからお話したいと思います。

「柔道教育ソリダリティー」

立ち上げまでの日々

私はずっと、柔道、スポーツ、教育一筋に取り組んでまいりました。ですから、このNPO法人に関わるまでは、教育改革国民会議や中教審のメンバーとして教育の在り方についてスポーツ界代表として、外務省よりむしろ文部科学省の方々とはるかに多く関わりがありました。

それが2002年秋、外務省から「相談したいことがある。ぜひ時間を作ってほしい」と1本の電話がありました。それで当時、欧州局長だった齋藤泰雄氏さん(現・在フランス大使)とロシア課長だった上月豊久さん(現・在ロシア大使館次席公使)にお会いしたことが、私が本格的に国際交流に取り組むきっかけとなりました。

お二人にお会いして食事を共にしながら伺ったのは、2003年1月に予定されていた小泉純一郎元総理とプーチン大統領(当時)との会談のことでし

た。両首脳は、それに先立つAPEC会議で顔を合わせたものの、あまり友好的な雰囲気ではなかったとのこと。プーチン大統領(当時)は柔道家であることから、「首脳会談でお土産になるような話はないだろうか」と私に相談されたわけです。

そこで、最終的に3つの事柄がまともりました。ひとつは、2004年のアテネ五輪に向けて柔道の日露合同合宿をやること。ロシアから選手が参加してくれるなら、山下が責任を持って受け入れようということ。もう一つは、2003年6月にサンクトペテルブルグ遷都300周年で世界の首脳が集う場へ、山下を連れていくこと。

同市にあるプーチン大統領(当時)が育った道場で、小泉総理とプーチン大統領(当時)の首脳会談をやるとういうわけです。二つ目は、2001年にプーチン大統領(当時)が出した『プーチンと柔道を学ぼう』という本の日本語版出版です。すでに英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語などで翻訳されていましたから、これを日本語でも出そうと。出すなら、山下が帯に推薦文を書きますよ、ということ。以上のような話を「お土産」にしようということになりました。

結果的に、首脳会談は良い方向に進み、その結果、私は2003年5月末にサンクトペテルブルグに行きました。プーチン大統領(当時)が育った柔道場で小泉・プーチン両首脳を前に私がロシアの若い選手たちを指導し、その後、三人で少し話をしました。これはその時の写真です。



この後、両首脳はフランス・エヴィアンでの首脳会談に向かいましたが、後から分かったことによると、アメリカのブッシュさん、イギリスのブレアさん、フランスのシラクさん、中国の胡錦濤さん以下、世界の首脳のうちで、遷都300周年の記念行事の中でプーチン大統領(当時)と個別に会談できたのは、ブッシュさんの他は小泉さんだけだったということでした。

これもまた後から聞いたところによると、このような動きの提案をしたの

は橋本龍太郎元総理だったということでした。私も橋本先生がお元気な頃にはよくお会いしていました。橋本先生は剣道家で、私は柔道家です。それで橋本先生から齋藤・元欧州局長に「おい、プーチンは柔道が大好きだろう。うまく山下君に協力してもらって後の仕事につなげる」と提案があったとのことでした。

会談があった2003年6月1日、朝のNHK「おはよう日本」という番組で、小林和夫さん(元NHKモスクワ支局長)によるプーチン大統領(当時)のインタビューが放映されました。少しお聴き下さい。

(ビデオ再生)

小林IIプーチンさんの臨機応変さは、柔道に関係があるのではないかと思っております。「インタビューでは柔道談義をいかがでしょう」と取材を申し入れていたところ、3日前になって実現することになり、慌ててモスクワ郊外の森の中にある公邸に伺いました。ここは彼の柔道の練習場にもなっています。そこには、嘉納治五郎の銅像がありました。プーチンさんは「柔道が人生を変えた」と言っており、その話を聞きました。

プーチンII私が生まれた家は決して裕福ではありませんでした。子ども頃の私は、日本の方々には想像もつかないかもしれませんが、通りを仲間たちとブラブラしているようなゴロツキの一人だったのです。自分を従え、ガキ大将になるために体を鍛えました。ボクシングやレスリングをやり、やがて柔道に辿りついたのです。柔道との出会いは、私に転機をもたらしました。考え方や人生観、人との関わり方など、柔道が今の私を作ったと言えます。相手の力を利用するという柔道の考え方は、初めは理解できませんでしたが、練習を繰り返すうちに次第に分かってきました。相手が何をしようとしているのか、どういう得意技があるのか、あらかじめ知った上でそれに打ち勝っていく。相手の体重、体の特徴、技の癖を利用して、自分の戦いを有利に進めるのです

小林II外交でも相手の力を利用するわけですね。プーチンはひとりドイトツに乗り込み、ロシアの借金を手腕でほとんどチャラにしたこともあります。そしてチャラにした分ドイトツ国民を感激させた。(2002年)9月の大洪水の時に、2年に分

けて返すはずだった借金を「お困りでしょう」と一括返済したのです。これこそ、プーチンさんならではの。

キャスターII冷血な指導者という印象もありますよね。

プーチンII私はどちらかという短気ですぐ頭に血が上ってしまうタイプでした。それは好ましい結果をもたらさないことを、柔道を通じて学びました。大切なのは、自分の気持ちを抑えること、冷静になることです。冷静になれば、どんな状況でも素早くかつ適切に対応することができます。そういうことを、私は柔道から得たのです

小林II小泉総理にとつて手強い相手ですね。でも柔道が大好きで、柔道は日本の文化だということで日本の文化にも敬意を持っている。娘さん2人にも柔道をやらせています。そういう人物が長期政権を築く。小泉さんもロシアの音楽などに非常に造詣が深いし、首脳会談としては好敵手となると思います。

(ビデオ終了)

2003年6月1日は、私が46歳になった日でした。日本に帰ってからの

ビデオを見て、驚きました。その年の9月に国際柔道連盟教育コーチング理事になることが決まっていたがこのビデオを見て前々から松前重義先生もお話しされていた「柔道で日本の心、和の心を伝える活動を通して、世界と友好信頼関係を築くことが大事」という考え方を、プーチン大統領(当時)のインタビューを見て、明確に確信したのです。

その後、山下という名前を出してプーチン大統領(当時)の感触もよく首脳会談につながったことから、外務省によって私は日露賢人会議のメンバーに選ばれることになりました。柔道仲間から「お前は、熊本県人ではなかったか」などと揶揄されたこともありましたが、そういうレベルの人間がいきなり引き出されて、1回目の日露賢人会議に参加することになりました。



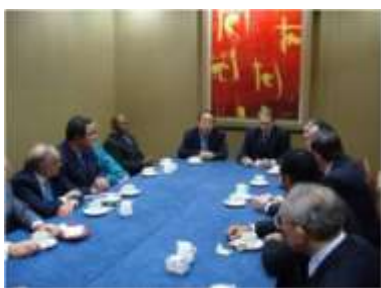
これがその時の写真です。本当は端にいるべきところでしたが、プーチン大統領(当時)が私と親しく話して下さるものからです、自ずと大統領(当時)の近くに座ることになった訳です。この場で、後々お世話になることになるトヨタ自動車の奥田さんと出会いました。奥田さんも一橋大学時代に柔道をやっていたことから、交流が少しずつ深まっていきました。

2003年9月に大阪で開催された国際柔道連盟の総会で、私は教育コーチング理事に就任しました。競争相手がなく無投票。私の柔道人生の誇りは、外国人選手に破れたことが無かつたことなのですが、それが4年後の改選では見事に破れ、まさに完敗、一本負けをきつすことになりました。



この写真は、慣れない英語で一生懸命スピーチをしているところです。国

際柔道連盟の教育コーチング理事の役割は、柔道を多くの国々の中でも取り分け発展途上国に対して普及を図りにあります。私は全日本柔道連盟や講道館、外務省、国際協力基金、民間企業など、多くの協力を得ながら様々な活動を行なうてまいりました。これは韓国での理事会に出席した時の写真です。



各方面の協力のおかげで、国際柔道連盟として初めて女性コーチングセミナーを福岡で開催することもできました。世界各地でセミナーを行い、同時に柔道に関する教材の作成にも関わりました。日露賢人会議の縁で知り合った奥田さんから「一緒に本を出そう」と提案いただき、2005年8月には『武士道とともに生きる』(角川書店)を出版しました。



その中で、奥田さんから私に一つの提案がありました。「なかなか良いことをやっているが、良いことをやるための時間より、お金集めに飛び回っているのではないか。あなたの限られた時間を有効に使うために組織を作り、広く浅く多くの人たちに協力してもらったらどうか。そのためなら僕の名前をいくら使っても良い」とのこと。当時はそのようなことは全く考えたこともありませんでしたから、驚きました。

正直なところ、一人でやっていたら大変なことが多いものです。けれども、組織を作つて多くの方々との理解や協力を得るとなると、責任の大きさが違います。それで副理事長の橋本敏明先生、事務局長の光本恵子さんのお二人に相談し、どこまでやりきれるかとは分からないが組織を立ち上げようということになりました。そして2006年4月、多くの方々との御支援の下、このNPO法人「柔道教育ソリダ

リティー」を立ち上げたわけです。

リサイクル柔道衣の贈与で

途上国の柔道を支援

メインの活動は、リサイクル柔道衣の無償贈与です。これは、私が理事を務める以前から全日本柔道連盟、講道館、国際柔道連盟と共同事業でやっていたものを引き継いだものです。私が理事になってからだけでも、ザンビア、ソロモン諸島、フィジー、ホンジュラス、モンゴル、マダガスカル、インドなど、143カ国にリサイクル柔道衣が渡つていきました。

現在、国際柔道連盟には199の国や地域が加盟しています。多くの国が貧しく、柔道をやるうにも柔道衣ではなく短パンやTシャツでやっているのが現状だと、JICA青年海外協力隊の方からも聞いています。日本では考えられないことですが一着の柔道衣を何人もが着回しているところもあるのです。

また、指導者、学生ボランティア、大学院生などの海外派遣も重要な活動の骨子です。これまでに14名派遣しました。



この写真は、私が国際交流基金により、パリの日本文化会館10周年記念でフランスに行った時に指導している写真です。



こちらは、プーチン大統領(当時)と子どもたちを指導している時の写真です。その他、モスクワや青島、南京等、限られた時間ではありますが、同様の指導を展開しています。

サンクトペテルブルクでは指導者を対象に、光本健次先生や世界チャンピ

オンの柏崎克彦先生、中西英敏先生等による講習会も開いています。今年の5月には、井上康生も行きました。その他、学生ボランテアもインドネシア、青島、デンマーク、ラオスなどに指導者として派遣しています。

決して十分な数ではありませんが、外国から指導者や選手の受け入れも行ってきました。中でも、北京オリンピックに向けて中国男子柔道に特化した支援を行ったことから、数で突出しているのは中国です。

日露友好の懸け橋になった

嘉納治五郎師範の書

次に、日露交流に話を進めたいと思います。

2005年、プーチン大統領(当時)が日本に来られました。2003年に小泉元総理がモスクワを訪問して以来、プーチン大統領(当時)の訪日が期待されていましたがなかなかまとまりませんでした。それが11月に実現したのです。

その時、私から外務省に「プーチン大統領(当時)にお渡ししたいものがある」とお話しし、訪日初日の最後のスケジュールとして、私とプーチン大統領(当時)の面会ができませんでした。私が

大統領に渡したのは、嘉納治五郎先生が書かれた「自他共栄」という書です。私の恩師である佐藤宣徳先生から、「自分が持つていけるよりお前が持つていける方が相応しかろう」と頂いた物で、私の数少ない宝物でした。日露の間にはかねてから領土問題という難問がありますので、その解決にこの書が少しでも役立つならばとの思いを込めてお渡ししたのです。



当時は、2004年に北オセチア地方のベスランで発生した学校占拠のテロで傷ついた子どもたちを、毎年12月に福岡で開かれる国際中学生柔道大会に招待する計画を進めていました。驚いたのは、プーチン大統領(当時)に会って最初に言われたのが、「テロで傷ついた北オセチアの子どもたちを柔道で日本に招待し、励ましてくれると聞いています。ロシア国民として、この好意に心から感謝を申し上げます」という言葉だったことです。

大統領(当時)とお会いしたのは11月、翌月にベスランの子どもを招くことはまだ実現もしていないのに、そんな小さなことまで多忙な大統領(当時)が知っているものなのか。

しかし、交流を重ねるうちに段々分かってきたことがあります。どこの組織でもそうだと思いますが、トップが喜ぶ情報はすぐ伝わる。私がこのNP法人でロシアとの小さな交流をして、耳に入るので。

私は嘉納先生の書をお渡しするにあたり、「日本とロシアが共に協力して発展していくことを願ひ、この書を贈ります」とお話ししました。プーチン大統領(当時)は少し驚かれた様子で、「これは本物ですか？」と(笑)。今でもはつきり覚えています。「もちろん、本物です」と私は胸を張りました。すると「とても私一人の物にしてはいけません。皆で共有しなければ」とおっしゃいました。柔道をやったことの無い人にとつては大した物ではないのかもしれませんが、嘉納治五郎師範直筆の書は、大変価値あるものなのです。

余談になりますが、その日、最後のスケジュールを終えた大統領(当時)をエレベーターまでお送りした時、大統

領(当時)から「よろしかったら一緒に食事を」とのお誘いを受けました。世界中の報道カメラマンが並んで様子を見守り、「大統領(当時)とどんな話をしたのか聞かせて欲しい」と言われていましたので、「ではその説明が終わったら食事に伺いましょう」と側近の方に言いましたら、「そんなのは放っておいて、早く行った方がよい」と叱られました(笑)。食事の場に行ったら、大統領(当時)が真剣にメニューを見ている。ステーキハウスだったので、寿司のメニューを選んだのです。それに、日本の酒の熱燗。私は隣に座り、大統領と熱燗を酌み交わしながら色々な話をしました。

私は外国の方との交流も度々ありますが、日本酒の熱燗を飲みながらというのは聞いたことがありません。思わず「大統領(当時)は熱いお酒が好きなのですか?」と聞きましたら、大統領(当時)はニコリ笑って、「寒い時には熱いお酒が体を暖めるのですよ」とおっしゃいました。ロシアからいらして、11月の日本が寒いのかなあと(笑)。そんな疑問を持ちながら、首脳会談前夜の食事を共にしたわけですね。



この写真は、北オセチア地方ベスランの学校占拠事件の現場写真です。このテロで傷ついた子どもたちを外務省と連携して招待させていただいた訳です。ロシアからはテレビのスポーツチャンネル局が取材に駆け付けました。「日本の人たちがテロで傷ついたロシアの子どもたちを柔道の交流を通して励ましてくれる。この素晴らしい好意を多くのロシア人に伝えたい」とのことでした。



我々NPO法人としては、ベスランの子どもたちを支援するためにリサイクル柔道衣や畳などで支援しました。これはその贈呈式の様子と、新しい体育

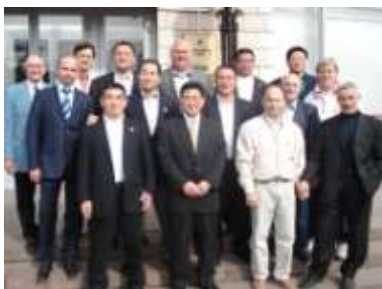
館で我々が贈呈した畳の上で柔道衣を着て練習する子どもたちの様子です。

さて、先ほどの書を贈呈した後日談です。大統領(当時)が帰国して間もなく、私に手紙が届きました。お礼とともに、「12月にロシアで柔道衣を着て子どもたちに柔道の指導をしたい。ついでにはぜひ、山下さんを招待したい」とのことでした。「お互い歳を取っているので、生きの良い現役の選手も一人同道いたたくとありがたい」とも申し添えてあり、井上康生に話しましたら、予定をキャンセルして同行してくれました。これは、柔道教室の様子と、指導が終わって私が大統領(当時)と握手を交わそうとしている時の写真です。



先ほども少しお話しましたが、私は2007年のブラジル・リオデジャネイロでの国際柔道連盟総会の理事改選で、アフリカの候補に大敗をきつしま

した。翌日から総会が始まりましたが、2日目にプーチン大統領(当時)の柔道の先生であるアナトリー・ラフリン先生が私の下を尋ねて来られました。「山下さん、今の柔道を見てから。日本の本来の柔道の姿から、かなり変わってきている。姿勢も柔道的心もだんだん薄れてきている。柔道は人間形成に大変役立つスポーツだと信じて、私は指導をしてきた。できたら、ロシアで正しい日本式の柔道を広めたい。それだけでなく、柔道の本当の心も指導したい。ついては、ぜひ協力してくれないか」と熱く語られました。それは、2009年5月に実現します。我々にとって幻に終わった1980年のモスクワ五輪の日本代表柔道選手団がモスクワを訪れ、ロシアの柔道指導者に講習会を行なったのです。



これは、モスクワ五輪に参加してい

ば我々が試合をするはずだった会場の前で撮った記念写真です。

訪問団は私を含めて6人でしたが、私以外はプーチン首相とお会いしたことがありません。そこでロシアの友人を紹介し、「3分でも5分でも良いから、この幻のモスクワ五輪柔道チームと大統領の面会をかなえてくれないか」と頼んだのです。友人は考え込み、「この時期は首相が一番忙しい時期。頼んではみるけれど、こればかりは難しいぞ」と言われました。ところが、行ってみるとプーチン首相が我々のために迎賓館で晩餐会を用意してくれていたのです。これが幻のモスクワ五輪の日本柔道選手団とプーチン首相との晩餐会終了後の写真です。



驚いたことに、その翌日、プーチン首相は組閣名簿を発表。ロシアの方から「プーチン首相に最後に会った日本人

は福田康夫元総理だろう。だが、プーチン首相に初めて会った日本人は、あなた方だ」と言われました。我々は、プーチン首相の気持ちを大変ありがたく思った次第です。



これは世界選手権を4回獲った藤緒省太先生が熱心に指導されている時の写真です。柏崎克彦先生、河原月夫先生、森脇保彦先生、香月清人先生など、みんな日本代表や世界チャンピオンです。私が一番若く、川原先生は私より8歳年上ですが、みんな多少は動かない体を目一杯駆使して、一生懸命に指導に当たった2日間でした。その様子はDVDに収録され、ロシア柔道の教材として役立っています。

その前年の2008年に北海道で洞爺湖サミットが開かれた時のことです。サミットが終わった翌日の7月9日、朝日・読売両紙がトップで、「ロシアの

メドヴェージェフ大統領が領土問題解決へ意欲」との記事を載せました。私はこれを見た瞬間、井上康生と柔道指導を終えて参加したプーチン大統領(当時)との食事会のことを思い出しました。

プーチン大統領(当時)は最初に、「山下さん、ロシアと日本の間には前々から難しい問題がありますね。しかし、これ以外には何も問題は存在しませんし、作ろうという気持ちも全くありません。ですから、何も心配せず安心して下さい。両国が知恵を絞ってこの問題を解決すれば問題は何もなくなる。さあ、乾杯しましょう」と挨拶し、始まりました。6〜7人の食事会でしたが、その時、プーチン大統領(当時)の隣に座っていたのが、当時は第一副首相でガスプロム会長だったメドヴェージェフさんだったのです。一言も話さずにニコニコしていたのが印象的でしたが、その夜、サンクトペテルブルク総領事にそのことをお話ししたところ大変驚かれて「メドヴェージェフといえば、次期大統領としてプーチンの後継者の最有力候補ですよ」とのことでした。そういうわけで、新聞記事を見た時に、あの晩のプーチン首相の話と、メドヴェージェフ大統領の顔が浮かんだ

というわけです。

『プーチンと柔道の心』を出版する



2009年4月には、プーチン首相にインタビューした小林和夫さんと私の共編著で、『プーチンと柔道の心』(朝日新聞出版)という本を出しました。本は2部構成で、後半はプーチンさんが書いた柔道の技術書。それに前半として私と小林さんが見た「素顔のプーチン」を加えたものです。先日、小林さんにお会いしましたら、「NHKのインタビュでプーチン大統領(当時)のプライベートの柔道場をお尋ねして、私はとても恥ずかしい思いをした」とのこと。「どうぞ」と促されてそのままスーツと道場に入ったら、その後、プーチン大統領(当時)が入り口で深々と礼をされた後に道場に入られたというのです。それで、「日本人としてとても恥ずかしい思いをした」とのことでした。「だから、出る時は深々と道場にお辞儀をして出ましたよ」。

そして、「柔道を通して強くなることも技が上手くなることも世界に勝つことも大事だけれど、そういうこともしつかり教えながら広めて下さい」とお話されました。

去年の5月にプーチンは首相として来日しました。この本の出版記念パーティーは、5月12日夜10時から都内のホテルで開催されました。後で私が知ったところによると、プーチン首相の日本滞在時間は24時間の予定だったそうです。前日の夜10時に羽田に着き、12日の夜は麻生元総理との晩餐会が終わり次第、10時に飛び立つ予定。それを羽田空港への道筋まで決まっていた段階で、プーチン首相は我々の出版記念パーティーに出席するために予定を変えてくれたのです。約1時間いらっしやいました。

出版記念パーティーには、このNPO法人の皆様方にも広くご参加いただいて盛り上げたかったのですが、プーチン首相が来られるかもしれないとのことで外務省からも厳しく人数制限され、私も橋本副理事長も光本事務局長も、スタッフとしての参加という形にしたわけです。

これは、3月15日にホワイトハウス（首相府）で挨拶している時の写真で

す。面会が終わった後に日本大使館に連絡して、マスコミに知られると色々聞かれることになるから伏せておいてほしいとお願いしたのですが、なんと翌日のプーチン首相のホームページの最初に、この写真が載っております（笑）。



日中友好のために

各地で柔道館を建設

ここで少し日中交流の話もしておきたいと思います。まだNPOを立ち上げる前のことです。2004年に上海で国際柔道連盟の理事会を開きました。その後の懇親会で、中国柔道連盟の会長から「中国の女子柔道は強く、日本の良きライバルだが、それに比べ男子は弱い。北京五輪までの4年間はあつという間である。男子柔道のことを考えると夜も眠れない。なんとか男子にも活躍してほしいので、力を

貸してくれないか」と、両手を強く握られてお願いされたのです。

当時はまだNPOも立ち上げておらず、「できる範囲で協力しましょう」ということになりました。その後、奥田さんとの対談集を出版した折に日中交流の話も出て、私がそのことを話したところ、「良い話じゃないか。ぜひやりなさいよ。いくら必要なのか」ということになり、トヨタ自動車だけでなく、新日鉄や全日空にも声をかけていただき、3社の協力により、2008年まで北京五輪に向けて中国男子柔道の強化を支援することになったわけです。これはその時、中国男子チームの歓迎会での写真です。



そのうち外務省から、北京五輪に向けた短期的なものだけではなく、中長期的な視野に立って中国と柔道を通じた交流を考えないか、との話をいた

できました。2006年頃、ちょうど日中関係が悪化して中国の反日運動が高まり、破壊活動まで起こっていた頃だったと思います。

そこで一つの提案をしました。中国でも田舎に行けば、1000万円規模の支援で学校が一つできる。それなら中国に柔道場を作り、柔道を通して交流を図っていったらどうか。

それで2006年11月、中国の中でも柔道に熱心だという青島に視察に行きました。初めての中国との交渉となったわけですが、その時、ちょうど同じ飛行機の中に今日もお見えになっている国際交流基金の富樫史生さんがいらっしやいました。以来、こちらのやろうとすることを全面的に支えていただいています。青島での交渉は、話と協定書の内容が全く違うなどの問題もありましたが、それらも確認していただき、良い方向に進めることができました。現地では中国政府や体育協会、柔道連盟などの担当者が来て協議し、最終的に建設地に相応しい場所を選びました。

一方、この話を進める中で、私は一つの疑問を抱くようになりました。元々この活動は、貧しい発展途上の国々に柔道を通して柔道の心、和の

心、日本の心を伝えていくことが主な目的であったはずですが。しかし、ロシアも中国も発展途上の国ではなく、むしろお金持ちは日本より多い。そのような国を相手に交流を進めていくことが、我々本来の活動の目的と合致するのだろうか、という疑問です。

青島で交渉を進めていた時のこと。

日清戦争後の荒廃の中で、これからは優秀な若者を育てるために海外で学ばせようと、多くの若者が日本に学びに来たという話を聞きました。そして、それを真つ先に受け入れたのが、柔道の創始者である嘉納治五郎先生だということを知ったのです。嘉納先生は、中国からの留学生を受け入れるため弘文学院という学校も作り、13年間で7000人以上の中国人留学生を受け入れたそうです。その中には文豪の魯迅もいれば、毛沢東の義理の父親もいて、毛沢東の体育に関する考え方は、嘉納治五郎先生の影響によるところが大きいとのことも知りました。

本音を言えば、体育学部武道学科で柔道を専門とする私が、そのようなことを知らずに青島で柔道教育をするとは、大変恥ずかしい限りなのです。実は私に限らず、日本の多くの

柔道関係者がこのことを知りませんでした。日本に戻ってから一生懸命勉強して、これが事実であったことをあらためて確認した次第です。

柔道を通しての国際交流は

日本にとって大切な仕事

日露交流については、松前重義先生が東海大学を通して旧ソ連との交流を大変盛んに行なっていたのを知りました。松前先生は、私にこんなことを話されたことがあります。「私がなぜソ連と交流を図るか分かるかね？ 私は共産主義には反対だ。ソ連の主義主張は受け入れることができない。しかし、今の日本は政治も経済も全てアメリカの方を向いているのはどうか。日本海という小さな海を隔てた向こうにはソ連という大国がある。みんながアメリカを向いている時だからこそ、民間レベルで細くても長いパイプを繋げておかないと、いざという時に大変なことになる。だから僕はロシアの文化、学術、スポーツを通しての交流を進めているんだよ」とのことでした。

ロシアも中国も決して発展途上国ではなく、大国です。それでも多くの会員の方々にご賛同いただき、柔道を通して交流をすることができるのであ

れば、これは日本にとって大切な仕事だろうと、その思いで今日まで活動を続けています。

小川郷太郎大使(本法人理事)の尽力で、2008年にはこれからの中国柔道を担う方々を東京に招くこともできました。青島の徐殿平先生と南京の劉俊林先生です。実は中国からぜひもう一つ、今度は北京に日中友好柔道館を造ってほしいとの話があります。北京の柔道の責任者は熊鳳山先生です。



2007年11月、日中友好青島柔道館がオープンしました。これはオープニングセレモニーの写真です。現地では、講演会などもやりました。

開館1年後に再訪問し、中国国営中央テレビから取材を受けました。人気キヤスターと私の対談で、場所は日中友好柔道館。視聴率もかなり高か

ったようです。これはその時の写真です。



キヤスターは柔道をやつてはいませんが、嘉納治五郎先生や私についてよく勉強しておいて下さいました。当日は彼が中国の柔道衣を着て、私が日の丸の付いた柔道衣姿で対談し、中国全土に向けて放送されたのです。

(放送ビデオ入る)

まだ続くのですが、時間が押してきますので、この辺にします。

以上のように、画面で「日中友好柔道館」の文字が流れる中、45分間にわたる深い内容の対談が人口12億人の中国で高い視聴率をもって放映されたわけです。おそらく、我々NPOの日中友好に対する深い思いを真摯に受け止めてくれて、自分たちも日中

友好のために何かしたいという気持ちがあるが、この番組につながって行ったのではないかと思っています。

2008年には、中国共産党の機関紙『人民日報』に私の柔道を通じた中国の平和への取り組みが紹介されました。このことも、中国側が我々の取り組みをしっかりと理解しようとしてくれる表れだと感じました。

南京での友好柔道館建設



これは、終戦記念日に読売新聞で大きく掲載された記事です。青島で日中友好柔道館の建設計画を始めた時、実は南京市からも同じ話が来ました。「次はぜひ南京で」というわけです。

その時の私の対応は、非常に冷たいものでした。「これは国民の税金で作るもの。一つ目ができて、本当に日中友好に役立つことが分かって初めて二つ目に取り組むことができるものだ」とお話ししたわけです。

実は南京にも造りたいと思っただけですが、それが終戦記念日に新聞記事としてこのように載ってしまいました。それで、小川大使に「どうしましょうか」と相談したところ、外務省と話して下さいまして、「とても良い話だからぜひ進めてはどうか」ということになりました。そして2008年、南京に行つて現地の体育協会などと話を進め始めたわけです。

南京大学でも講演しました。学生たちは大変熱心に話を聞いてくれましたが、最後にこんな質問を受けました。「思いは分かったが、なぜ南京なのか」と。

私は正直に答えました。「青島の次に建設するのに相応しいのは、南京以外に思い付かなかった」。すると突然大きな拍手が湧きました。こちらの思いが伝わったと感じた瞬間でした。

そして今年の3月、南京柔道館が外務省の「草の根無償資金協力」によって完成しました。私も現地に行き、多くのマスコミからも「良いことをやった」と言葉をいただいた訳ですが、ただ一つ、私にとつて大変残念なことがあります。南京大虐殺の問題で、多くの日本人が南京に足を踏み入れることを躊躇したことです。

南京には日本企業もほとんど進出しておらず、日本との交流が少ないのです。しかし、南京市は経済も含めてもつと日本と交流したいと考えています。私が南京を訪れて嫌な思いをしたことはただの一度もありません。現地にいる日本人と話しても同様です。中国各都市で反日暴動が起こった時も、唯一、南京だけは起こらなかったのです。しかし、NHKを除く全ての民放各社と新聞各紙は、こぞつて南京の枕詞に「反日感情の根強い」と付けました。

これでは、何のために外務省と一緒に努力してきたのか分かりません。来年、中央公論社から出す本には、そのことを詳しく書いています。南京市は、もつともつと日本と交流を進めたいと考えているのです。これは、この場でもあらためてお伝えしておきたいと思えます。

「柔道・友情・平和」の心で

本法人では、講演会も開催しています。今日の私の講演で8回目となりました。1度目の奥田さんの講演録や小川大使の講演録などもありますので、興味のある方はぜひお読み下さい。

このような活動を繰り広げてい

たのも、支えて下さる会員の皆さま、主旨に賛同していただいている外務省や国際交流基金、民間企業の方々のお力です。心から感謝を申し上げます。

今後は、これまでに以上に社会的役割が大きくなっていくことと思います。これからも色々なご助言をいただきながら、「柔道・友情・平和」という活動の主旨に沿うよう、歩んでまいりたいと思えます。

まとまりのない話でしたが、最後までご清聴くださりまして、ありがとうございました。

(了)